

「コーヒーをダブルでくれないか」

十八年間、頭の中でその台詞を何度も繰り返しているうちに、その言葉は記憶と口の中で使用価値がすり減って、知らない言語で言われたスローガンのように、意味がわからなくなつた。なぜそうなつたのかといえば、フェルナンド・テリーは忘却こそ最善だと努力したが、思いがけない時に起きる良心のあの反抗心に苦しめられ、その瞬間に何を感じるのかを抑えきれないほど頻繁に考えていたからだ。それはハバナのキャバレー《ラス・ベガス》の正面でダブルのコーヒーを飲んだあと煙草に火をつけてインフアンタ通りを越え、二十五番街をくだり、自らの過去の最良と最悪の部分に再会しようとするその瞬間のことだった。フェルナンドはその想像上の旅で、ノスタルジীরあらゆる種類のカードを切つた経験があつた。憂鬱から憎しみ、歓喜から無関心、怨嗟から安堵まで。しかし魂に突き刺さつていたあの攻撃的な悲しみが、「戻るべきだつたのか？」という問いとともに、薄暗い袖の中に隠れているとは

予想できなかった。

亡命当初のフェルナンドは、マイアミにあるオレンジボウルの避難所の息が詰まるようなテントで、米国の永住権を取得できるかどうかかわからないまま、不確かな数カ月を送った。その頃すでに、短期間だが必要な帰還について考えはじめていた。帰還すれば、何もかも壊した裏切りによって負わされた、まだ生々しい傷を止血する助けにはなるだろう。時間の外、別の場所にいる馴染めない目眩の感覚も治るかもしれない。そう考えているうちに歳月は経過し、帰還を難しくする法律と決まりが立ちはだかると、忘却もありえ、それが最善なのだと思ふようになった。徐々に安堵を感じ、落ち着いてきた。帰還したいという焦燥感は和らいでいき、ついにその苦痛も眠りについた。しかし、マドリードの屋根裏部屋で孤独に過ごしていると、島で暮らした三十年のどこかの瞬間を思い出すよう頭が主張して、それをなだめられないような夜には、その苦痛が目を覚ますのだった。

しかし、もう受け取るとは思っていなかったが、大きな不安をかき立てる内容を知らせるアルバロの手紙が来るようになると、帰還の欲求は密かな悪夢ではなくなつた。フェルナンドは最も危険な思い出しの詰まったトランクを再び開けるしかなかった。こうしてキューバを出てはじめて、ホセ・マリア・エレディアの詩と倫理をめぐる、頓挫した博士論文を読みだした。すると彼の頭は、アルバロの家まで導く道の一つひとつ辿るように主張した。その結果、いつも薄暗くてのぼりづらいあの階段が目の前にあられ、過去の旋風に巻き込まれるのだった。フェルナンドは想像上のその旅の中で、自分の行動や思考の順序、リズム、目的は変えるようにしていたが、はじまりは必ず《ラス・ベガス》のカウンターの前だった。酔っ払いや近くのラジオ放送局の職員、急いでいるバス運転手、いつもの放浪者と肘をぶつけながら、薄味の甘ったるい、古いカフェテリアならではのコーヒーを飲むのだ。だがそのカフェテリ

アは実は、頭から離れない記憶とハバナの夜の文学の中にしか存在しなかったのを知って、すっかり恥ずかしくなってしまう。つまり《ラス・ベガス》のカフェテリアと、磨かれて頑丈なマホガニーのカウンタ―は、人生のほかの多くの出来事と同様、姿を消していたのだった。

フェルナンドはせきたてられるかのように、戸惑いをもたらすその失望から逃げ、友人アルバロが住んでいる壊れそうな建物まで来たが、ごみに群がる鼠、硝石で傷んだ壁、疥癬かいせんにかかった悲しげな犬に囲まれた時、記憶と現実の闘いははじまったばかりであると感じ、アルバロの家にあがるより前にマレコン通りへ向かった。アルバロの家にはもつと心が引き裂かれるような不在と悲しみが待っている可能性があったからだ。

まだ日差し強い午後のその時刻、ハバナの住民を海と隔てている長い防波堤にはひと気がなかった。それを確かめてほとんど歓びに近い感情が生まれた。だが遠くには、釣れると信じて釣り糸を水に投げている漁師が何人か見え、派手な観光客用の帆船が湾から海に出ようとしていた。

フェルナンドは十八年間、その瞬間の細部と闘い、いつも最後は、途方に暮れるあの報われない感覚に襲われていた。そのせいで彼は帰還に意味があるのかどうか疑問を持つていた。だからこそフェルナンドは、アルバロの手紙、大文字だけで書かれた手紙、あらゆるためらいを吹き飛ばす局面に自分を向き合わせる知らせにしがみついたに違いない。こうして彼は、一カ月間のキューバへの帰国願いを出したのだった。「フェルナンド、フェルナンド、フェルナンド。ついに痕跡を見つけたぞ。きっとエレディアの失われた文書のありかがわかる」アルバロはフェルナンドにこう書いていた。引退後にフリーメイソンのグランドロッジの司書になった二人の恩師であるメンドサ博士は、国立古文書館の地下室に埋もれていたフリーメイソンに関する文書箱を発掘し、その文書の中には息が止まるような書類があった。